

観光経済常任委員会（小川洋平、江渡信貴、田中重光、竹島勝昭）

霧島市観光総合戦略の取り組みについて

霧島市は、鹿児島県本土のほぼ中央部に位置し、国際空港や高速道路、鉄道が交差し薩摩地方・大隅地方、宮崎県等、南九州3県を結ぶ交通の要所で、人口12万6278人と鹿児島県内でも2番目の人口規模を有する都市であります。豊かな自然、悠久の歴史を誇る地域でもあり、日本最初の国立公園である自然豊かな霧島連山を有しています。中心部に当たる国分・隼人地区にはソーニーや京セラの工場などが進出し、鹿児島県内でも数少ない人口増加地帯であります。

霧島市では官民一体となった誘客活動、「国立公園満喫プロジェクト」の推進、「霧島ジオパーク」活動など広域的な観光振興に取り組んでいます。霧島市の魅力を高めることで交流人口が増加し地域経済が活性化され、様々な業種に影響を与えます。そこで、観光によるふるさと創生を展開するため、霧島市観光総合戦略を策定しました。2018年から10年間を計画期間とし第二次霧島市総合計画と整合性を図りながら進めたそうです。

霧島市観光総合戦略策定のためのデータ収集として下記による調査がこなされました。

①外部検証ヒアリング

（JRや旅行会社等、個別に訪問し霧島市観光についてのヒアリング）

②観光ワークショップ

（広く意見を求めるため、高校生以上約11校120名の方々と観光資源について等、グループ討議をおこなった）

③観光施設来訪者アンケート

（206の日帰り施設に対し満足度やお土産に使った金額等インタビューによる聞き取り調査）

④宿泊客アンケート

（宿泊客に対し満足度や再訪意向等アンケート用紙配布による個別記載での調査）

⑤観光事業所アンケート

(150施設、1施設2名から経営・設備投資等、郵送配布・回収により調査)

⑥観光従業者アンケート

(仕事・生活水準の満足度や観光振興等を郵送配布・回収による調査)

戦略策定組織、推進体制については霧島市観光総合戦略会議設置要綱に基づき、副市長をトップに霧島市観光総合戦略会議により全庁的な体制で実施。官民一体となった取り組みが行えるよう、霧島市観光推進会議を実働部隊とし、当該年度(前年度は5年間)の進捗状況を取りまとめ霧島市観光総合戦略会議に報告し、事業実施状況等について検証します。

基本目標は

①国内外の観光客の誘致

(2010年～2016年までの観光客数・宿泊内訳内容から目標値をたてた)

②観光素材の創出と活用

(開発又は磨き上げた観光資源の数 2017年度の目標値 45本を基準として 55本に。毎年2本ずつ増加。5年間で10本プラス)

③利便性の高い観光地づくり

(2017年度 56%を基準に5年間でプラス5%の61%)

経済効果として5年間で34億1500万円とする。

戦略推進の具体的取り組みについては先程の3つの基本目標を軸とし目指すことを10項目、取り組むことを32項目上げ、①「観光地・霧島」のイメージ戦略、②訪れた方へのおもてなしの充実、③誰もが楽しめる環境づくりを強化すべき3つの視点で捉え事業を推進していくとのこと。

戦略はどこの自治体でもあるが、霧島市の場合は全庁また官民一体となって基本調査から戦略まで推進してきた。また、女性の参画も推進しており霧島市地方創生有識者会議委員も4分の1が女性であり霧島市総合計画審議議会委員では半数以上が女性である。観光のことは観光課が中心に考えるが、霧島市の場合、全庁の参画において福祉課から見た観光、教育委員会から見た観光等、特徴的な事業として上げている。横断的な戦略とはこのような付加価値を生む。十和田市も「横断的な・・・」と、よく話が出るが付加価値が生まれるような施策を考えていかなければならないと感じました。少子高齢化社会、スピードをもち実践的かつ具体的な方法はいろんな面から考えていかなければならない。人と人・人と情報・人と地域資源をどのように結びつけるのか、もう少し落とし込まなければならないのではないかと。

鹿児島市の観光施策、イベントの取り組みについて

鹿児島市は島津氏の城下町として発展し、南九州一の都市として繁栄と進展の歴史をつくりあげてきた。大陸や南洋諸島という立地から、必然的に琉球を中継地として早くから貿易も活発に行われた。戦後は観光・商工業の発展とともに市域は次第に拡大していき昭和55年には人口50万人を突破した。平成8年には中核市へ移行し平成16年には5町と合併、人口60万人の県郡として新生鹿児島市それぞれの魅力をもったまちづくりに取り組んでいる。

平成27年7月に鹿児島市では「旧集成館関連遺産群」を含む「明治日本産業革命遺産」が世界文化遺産に登録され、また、大河ドラマの「西郷どん」が放送されるほか平成32年には「かごしま国体」が控えています。これらを絶好の機会と捉え観光交流都市として、観光・コンベンションのさらなる振興に取り組んでいき、これまで以上に交流人口の拡大を図ることで地域経済の活性化による市民福祉の向上につなげていきたいそうです。「鹿児島の経済成長のエンジンとなる稼ぐ観光」を基本目標に官民一体となって着実に進めていくことが大切で活発な議論を重ね進めているとのこと。

鹿児島市は高次都市機能と豊富な観光資源を備えた、観光に優位性のある地域です。このメリットを生かし、鹿児島市の資源を生かした観光振興を図ることで、より地域経済の活性化につながっていく。

雄大な桜島と波静かな錦江湾に代表される世界に誇れる自然・景観、幕末から明治維新にかけての歴史・文化、温泉、小中・黒豚・黒牛・桜島だいこんをはじめとする豊富な食など①個性豊かな観光資源の集積。

平成23年全線開業した九州新幹線、南九州自動車道や東九州自動車道の整備も進められ各地とのアクセスの向上。鹿児島湾が離島航路を有することに加えマリポート鹿児島島の整備が完了し大型クルーズ船の接岸が可能。鹿児島空港の国内航空路線は17路線、国際航空路線は4路線その他LCC路線も就航させている。②陸・海・空の交通結節点。

高次都市機能が集積する一方、豊かな自然も有しており、都市型観光やグリーン・ツーリズム、スポーツ・ツーリズムを楽しめるなど多様な魅力がある。

③高次都市機能の集積と豊かな自然などです。

もう一方、課題として①国内市場縮小の中での観光産業の振興。②急増する

外国人観光客への対応。③広域的視点による取り組みが挙げられます。それを踏まえ世界から選ばれる鹿児島を目指すべく「新しい魅力づくり」戦略的なプロモーションの展開「攻めの情報発信・誘客」快適で安全な観光視点のまちづくり「受入体制の充実」の3つのプロジェクトを基本戦略とし第3期鹿児島市観光未来戦略を策定しました。策定年度は平成28年度。計画期間は平成29年～33年度。数値目標は入込観光客数1,050万人。宿泊観光客数380万人。外国人宿泊観光客数30万人です。平成27年度対比で見ると、入込は97万人増。宿泊は34万人増。外国人の宿泊は10万人増。1人あたりの観光消費額は5,000円増。再訪の意向は50%だそうです。

イベントの充実による年間を通じた集客力を高めるために

①食の都、鹿児島づくりとして、黒の食材（黒豚、黒牛、黒さつま鶏など）や錦江湾で採れる海の幸、農産物、芋焼酎、鹿児島ならではのスイーツなどの豊かな食を生かした民間イベント等の促進。

食を活用したイベントを充実させるため、民間が主催するイベントについて最大5年間支援（補助割合1/2、最大500万円）。鹿児島らしさのある取り組みでまちの賑わいを創出しつつ、民間の自立を促すのがねらい。

②四季を通じたイベントの開催として、8月のかごしま錦江湾サマーナイト大花火大会や11月のおはら祭り、1月の天文館ミリオネーション、3月の鹿児島島マラソン等、新たな観光イベントの創出に力を入れています。

③平川動物公園とかごしま水族館の魅力発信としてコアラやホワイトタイガー、また、イルカやジンベイザメなど人気のある動物を有する両施設について、南九州におけるトップクラスの娯楽性に磨きをかけて多様な魅力を出し国内外からの誘客促進を図る。

④個性ある交通機関の活用を推進するために、市内の観光地などを巡る観光周遊バスや路面電車、錦江湾内を周遊するクルーズ船など、個性ある交通機関を生かした回遊性の向上を図るために、観光レトロ電車「かごでん」・イベント電車の更なる活動や路面電車観光路線の検討など進めています。

今後は十和田市同様、官民一体となって戦略的かつ広域的に観光客の誘致・受入態勢の充実を進めるため、地域の観光マネジメントのプラットフォームとなるDMOの設置も視野に入れ鹿児島観光コンベンション協会の組織体制の強化に力を入れていくそうです。